

三好新道

三好新道は、明治 17 年に大久保謙之丞が提唱し、愛媛県（香川県を含む）※、高知県、徳島県の 3 県が推進した四国新道のうち徳島県に属する 31.4km の道路です。阿波新道とも言われています。四国新道は、丸亀、多度津から池田を経て高知、須崎に達し、さらに佐川、松山、三津浜へと連なる四国全県にまたがる総延長 280km、幅員最小 6.4m、最大 12.7m の幹線道路で、明治 19 年に起工、明治 27 年に完成しました。このうち、三好新道の完成は明治 23 年でした。※明治 17 年当時、香川県は愛媛県に含まれており、香川県が愛媛県から分離独立したのは明治 21 年でした。

当初、徳島県では新道が県西部の三好郡を通過するだけで十分な効果が得られないこと、経済不況や暴風雨による被害もあり新道開削の費用負担はできないとして計画参加に慎重でしたが、愛媛・高知両県令の強い勧誘や三好郡長の武田覚三の働きかけなどもあって参加することになったといえます。明治 18 年に 3 県が四国新道開削計画を内務省に提出し、認可されました。徳島県は、明治 19 年に東州津に県土木出張所を設置し、州津、西井川、池田の 3 村で事業に着手しましたが、平坦地や耕地が少ない地域では用地買収は容易でなく、三好市池田町ヤマダの三好新道完成の民益碑には住民の反対や不平のため用地買収がいったん頓挫したものの、総代による交渉で用地の買い上げができたことなどが記されています。

三好新道の工事では、阿讃国境の猪ノ鼻峠、吉野川沿岸の大歩危・小歩危の開削、四国山地の横断が難工事となりました。このうち、吉野川沿いの旧道は大歩危の険を避けて山城町（現三好市）下名から北西方向へ向かい根津木峠、白川口へ出るか、高知県本山町川口から笹が峰を越えて愛媛県新宮村へ出ていましたが、新道は吉野川の河岸に沿って歩危の岸壁を切り開き、徳島県と高知県を結びました。さらに困難な工事は架橋であり、数箇所新たな橋梁が架設されましたが、明治 23 年の三好新道の完成時には吉野川を横断する大具渡しと白地渡しは未解決のまま残されました。白地渡しは昭和 2 年の三好橋の完成まで、また大具渡しは昭和 35 年の三好大橋の完成まで、三好新道の最大の障害となっていました。

三好新道は当時としては幅員が広く、傾斜の少ない道路でしたので、荷車や牛馬車の通行ができるようになり、人や物の行き来が増えたことにより、沿線地域の様子も変わりました。猪ノ鼻峠は香川県から徳島県へ米や海産物が、徳島県から香川県へ葉たばこが荷馬車で運ばれるなど交易の要衝となり、運送店や旅館、飲食店が開設されました。また、池田は葉たばこの集散地として栄え、人が集まり商店も増え、毎月定期的に市が開かれるようになりました。さらに三好新道と伊予川街道の結節点である山城町川口は、交通量の増加に伴い商店、旅館などが増えて賑わいをみせるようになりました。

三好新道は県道として整備されましたが、明治 28 年に国道 32 号線となり、大正 8 年に国道 23 号線、昭和 27 年に国道 32 号線と改称されました。三好新道は現在、香川、徳島、高知の各県をつなぐ大動脈として役割を果たしている国道 32 号の原型です。

<参考文献：四国の建設のあゆみ編纂委員会編「四国の建設のあゆみ」1990 年、徳島県史編さん委員会編「徳島県史第五巻」1966 年、大岩義雄編「猪ノ鼻道路の今昔」2021 年など>

